

# 地元の人びとは…

油井地区の人びと

大和国民学校の疎開学童を受け入れてくれた地元民の生の声

出席者（匿名）〈以下いずれも当時〉

- 油井村助役・警防団長
- 油井村疎開担当職員
- 学寮主人
- 学寮女主人
- 学寮婦人
- 油井国民学校6年在学者

司会 中野区役所学童疎開担当職員

これは、疎開学童を受け入れ、実際に疎開生活を推進した地元の人たちが、当時をふりかえって語る「私たちにとっての学童疎開」。苛酷な時代の流れの中で、大量の子どもたちを受け入れ、無事引き揚げていくまでの地域ぐるみの奮闘と愛情の記録である。

## 受け入れ要請から 駅頭の出迎えまで

● 私は当時、油井村の助役をやっておりまして関係で、最初学童疎開の話が出た時からお手伝いをさせていただきました。19年の6月9日に当時の地方事務局から公文書が参りまして、「学童疎開ニ関スル件」ということで関係者が集められました。そこではじめて、いよいよ戦争が苛酷になりそうなので、東京都内の学童を疎開させることになった。二本松地区でも受け入れることが決定したが、どこの学校がどこへ来るのかはまだはっきりしていない。とにかく来ることは間違いないのでその際はぜひ協力してほしい。これは国策で、戦争に勝つためである、というような話でした。もうその時に県の方ではだいたいのことは決まっていたのか、その時集められたのが、二本松、油井、小浜の町村長、地方事務所長、県視学官、警察署長、それに当時の配給統制組合の人などでした。ちょうど村長が出席できなくて私が代わりに出席しました。

—その時のみなさんの反応はどうでしたか。よけいな者が来て困るというようなことはなかったですか。

● 勝つためだから大いに協力してやらなければならないな、というような気分ですね。その頃は勝つためにはみんなどんなこともやろうと考えていましたから。

次に集められたのが6月25日で、今度は二本松警察署長名で「学童疎開ニ関スル協力ノ件」。その時集められたのは警防団長で、私は警防団長も兼ねておりましたので出席しました。その時も「勝つためだから協力してほしい」というようなことで、この前の時のくり返しのようなものでした。

その次は7月4日で、県事務所長と県視学官の名前で招集されて、二本松地区には東京の荒川区と中野区から疎開してくるということをはっきり言われたわけです。その後7月10日に、県視学官の方が役場にいられて、油井と小浜は中野区の大和国民学校の大半が来ると、しかし全員は収容しきれないので、安達地方事務所管内に分散することが内定したという旨をお聞きしました。

その時、中野区は非常にインテリ層



厚ぼつたい防空ずきんをかぶって…(20年  
2月上野駅駅頭にて 大和国民学校)

の多い地区だと聞いていたので、よかったなあとみんなで言ったことを憶えております。

8月の9日になって、東京視学官と二本松警察署の方といっしょに、大和国民学校の校長先生と教頭先生ともう1人先生が役場にお見えになって、「こちらにお世話になるかもしれません、ついては宿舎などを見せてもらいたい」と。で油井小学校などにご案内しました。小学校についてはオーケーだけれど、宿舎については、これでは便所の数が足りないとか、湯殿がまずいとか、学校同士で話し合われていたようです。

—宿舎を具体的に決めたのはいつごろですか。

● その前に視学官の方から、お世話になる場合は、どういう宿舎があるのか、大きな料理屋さんで宿舎に転向できるところはないかという問い合わせがあって、大谷屋さん、相模屋さん、枳屋さんという家があって、30人や50

人は大丈夫でしょうという話はしてありました。

——当時、そういう料理屋さんもう商売はできにくくなっていましたからね。企業整備とかで、また実際問題としても。

● そんなところで飲んでいれば在郷軍人に頭をたたかれます。酒も配給ですから、ドブロクを飲んでがまんするという状態でした。

ら牛車を2台雇い入れてほしいという申し入れが役場の方であって、当時馬車はもうほとんどなくて牛車です。いろいろ奔走して手配したんだけど、旧盆でみんな休んでいて、牛車は貸してやるからあなたの方で引いてくれ、ということになったわけです。そこで先生たちと当時警防団の第二団長をしていた者との3人で、貨車できた荷物を安達駅で降ろしたり積んだり、10時

次第でした。ところが小さな子どもたちが厚ぼったいのをかぶって。その姿を見て、こんなにがんぜない子を手放して遠くへよこした親御さんたちの気持ちはどんなだろうと言って女の人たちは泣いていました。何とか温かく迎えてあげよう、これがその時出迎えた人たちの一致した気持だったと思います。粗末にはできない、何とかして温かく、戦争を勝ち抜くまでお預かりしようというのが私らの第一印象でした。

● 私もあの時、駅頭に出迎えた一人ですが、小さな身体にリュックサックをしょって、水筒を持って、親御さんも子どももかわいそうだという気持ちでいっぱいでした。私は当時、役場に入って3年目目で、助役の下で勸業係、要するに配給や供出の係をやっておりました。同時に、助役が警防団長も兼ねておりましたので、その下で警防団の庶務部長もやっておりました。疎開関係も助役が中心になってやっておられましたので、私らは、下級職員として当然やらなければならないことを、手や足になってやってきたわけです。村の受け入れ体制は万全にできておりましたので、私も及ばずながら、自分の手でできることはできる限りしてあげたいと思っておりました。



“行ってきます”と元気に登校（20年油井第一学寮前にて 大和国民学校）

——じゃあ、もう8月の初めには4つの宿舎は決まっていたのですね。

● それまでにも、役場というよりも視学官と小学校側とでたびたび交渉は持たれていたようです。で8月12日に、大和国民学校から村長宛に、学童150名、疎開決定しましたという公文書が届きました。9日の時には下見に来たというごあいさつぶりでしたが、わずか3日後に公文書を受けとったわけです。帰られてすぐ区の方とでも相談なさったのでしょうか。

そしたら間もなく、大和の方から生徒の衣類や夜具が到着しました。8月31日になって、大和国民学校から先生が2人、初乗りと言うんですか、いろいろ準備のために先着された。その次の日が9月1日で、この日がちょうど旧盆の15日だったんですが、両先生か

頃からはじめて夕方までかかって。東京の先生方はおそらく牛車などというものは生まれてはじめて引いたんでしょうが、先生方自身も非常に真剣で、胸を打たれました。

そして第1回目の疎開が到着したのが9月5日の朝で、安達駅には、国防婦人会、警防団、役場の職員全員、油井小学校等の先生方、非常に大勢の方が出迎えました。

その子どもたちは、綿がいっぱい入った座ぶとんのようなふ厚い防空ずきんをかぶって、小さな肩に大きな袋を下げてホームに降りてきました。その姿を今でも憶えています。当時、こちらでも、防空ずきんをかぶれと警察がやかましくて、まさか空襲はされないうらやましいと思っていましたから、形式的なごく薄いのをかぶっていたような

## 食べ盛り、伸び盛りの子どもたちに

● 私は駅には出迎えずに、家の方で待っておりました。子どもたちが私の家に着いた時は、そりゃあもうお祭りにでも来たようなはしゃぎようで、張り切って二階に駆け上がって行きましたね。そして、駅でみんなにひとつずつ梨をいただいたんだと言ってとても喜んで、それを見て涙がこぼれました。ほんとうにかわいそうで、かわいそうで。ところが2、3日過ぎた頃から、家の方を思い出したんでしょうね、ケンカもしないのに、さわったくらいでケンカになり、泣くようなふりしてメソメソするんです。私も子どもが何人

もあったものですから、もう……。

- 4年生ですからね。10歳ですよ。うちに来たのは17人でした。
- そう、うちも4年生でした。食べ盛り、伸び盛りが40人です。東京の子どもたちはこんな食べるのかなと思いつつ、粉なんか配給になるとすいとんを作って、田舎で言えばだんご汁ですけど。おいしい、おいしい、もつとないのと言われても、配給ですからそうはあげられない。

汚ないことを言うようですが、小麦の配給のときは、お便所の上の方がすっかり小麦だけが浮いているんです。それでかわいそうだと思って、うちで品物と麦を物々交換して、麦ご飯にしたりしましたね。じゃがいもなんか大ぜいのところは皮むかないで食べさせたようですが、あれでもよかったのね、今思えば。私のところではぜんぶ皮むいて4つ切りにして食べさせました。

- ああ、やっぱり皮むきました？
- むきました。
- 17人の時はうちもむきました。で



ただいま。学校から学寮に元気に帰ってきた学童たち（20年 福島県 大和国民学校）

も小浜が来てからはもうむかなかつたです、大勢で。

- 小浜が火事になってから80人になったでしょう。とてもうちでできなくなって、学校側に頼みました。何でもよく食べてくれましたから、町の人た

ちも配給をよく分けてくれましてね。うちのおじいさんがリヤカーを引いてあちらこちらと野菜をいただきに回らしてね。私はそれを使って食べさせるだけですから、よそのことはよくわかりません。お弁当のおかずといえば、東京の方では鉄火みそというのだそうですが、こちらでは豆みそ、それを入れたり、何にもしてやれない、配給でまかなうだけですから。それでもたくさん食べさせたつもりですけど、目方を計ると来た時より減っていると聞かれるとね。本気になって一生懸命に食べさせてもやせるんでは困ったなあと思いましたけれど。子どもは場所が変わると目方は減るそうですね。冬になってサツマイモが配給になると、おやつにするんですけど、あの年は寒かったんです。あまり寒いとおいもも長く置けないので、乾燥いもにして少しでも貯えようと思って干しておくといつの間になくなっていくんです。子どもの手の届くところに干してあるのがなくなっちゃう。

最初、男の子と女の子とどっちがい

いかと言われた時、女の子はきつと家が恋しくて泣く子もいるだろうから、男の子の方が気が楽でいいかもしれないと思って、男の子をお預かりしたんですけど、畳の上で相撲はとる、庭が坂のようになっているんですけど、そこ



〈斎藤陸子氏提供〉

にソリを持ち出してすべる。芝から植木みんなすり切れて、今もって芽が出ません。そして小さな池があるんですけど、そこにタライを浮かべてワァワァ舟遊びもしてね。その池がこの前、何年ぶりかで来た子どもたちがこんなに小さい池だったかと。

- 当時は大きいと思っていたのね。
- そうでしょう、だってあんなに沢山の子どもがタライに乗って遊んだんですもの。冬になると、また汚ない話をするようですが、おしっこをするでしょ、そうすると寒くて30センチも氷になるの。それをカナヅチでパタパタやって。お腹こわすとお便所に行くまでに廊下を汚すんです。すると、先生がご自分で片づけてくれましてね。先生も大変努力なさって。寮母さんばかりにまかせておかないで、いちばん汚ないところは先生がしてくださいました。
- うちが製材工場だったから、前が空地になってたんです。そこからよくカエルをとってきて食べさせたから、この前、何十年ぶりかでみんなが来た時に、おばさん、あのカエルうまかった、うまかったって。弁当のおかずがなくて、イナゴも役場を通じて警察の方からもらったり。せんべいのような

ものももらってきて、弁当に入れたり。いちばんひどかったのは終戦になって配給が一時とまった時です。その前はあっちこちの家々からリヤカーで野菜もらっていたけど、それもできなくなってね。

● ちょっとぐらいもらったって役に立たないの、大勢なんだから。

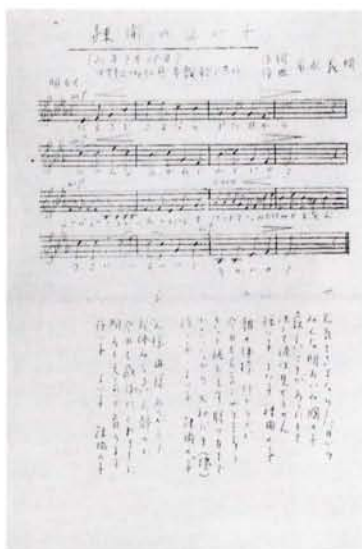
## 「疎開のよい子」を歌う 少女と「お呼ばれ制度」

● うちでは母親が疎開の子どもを預かっていたところへ、私が嫁いで来たんです、12月に。子どもたちが、私らの祝儀の席に入って楽しく歌唱なんか歌ってくれて。私の親元の方からついて来ていた人からお祝いにお金ももらったと言って喜んでね。うちはわずか10人位だったから家庭的な感じだったと思います。いっしょに畑に行って馬鈴薯掘ったり、トウモロコシとったりするのが楽しくて、今日は畑に行かないの、今日は畑に行かないのって。次の年の10月26日に子共たちは帰って行ったんですけど、その24日に、私お産をしたんですね、そうしたら赤ちゃん生まれて何て名前つけるのとみんなできりに聞いて、子どもの名前聞いて楽しんで帰っていったのが今でも忘れられません。

● 私は当時5年か6年で、地元の子どものとして、今でも忘れられない風景があります。夕方お使いに行った帰りに学寮のわきを通っていると、「さびしいことがあったとて、決して涙をみせません」と手すりにもたれてセーラー服を着た女の子が歌っているんです、空を眺めながら。日中はキャッキヤと遊んでいるのに夕方になると、やっぱり家を思い出して淋しいんだろうなと思って私も涙が出たのを憶えています。そこを通るたびにこの歌が聞こえるので、私もその歌を覚えましてね。「疎開のよい子」という歌なんですね。何かの時に子どもたちがうちに来たとき、この歌をみんなで歌いました。

● お祭りとお正月にお呼ばれに行った時じゃないですか。

● ああ、来ましたね。ごちそうそっちのけで、前の田んぼに行ってドジョウやカニを取って、どろんこになって。帰る時弟や妹の着る物みんな集めて着せて帰したの憶えています。疎開の子が遊びに来ると、ごちそうみんなそっ



〈仲町小学校提供〉

ちに行っちゃって、うちの子どもたちは食べるものがないんです。すると母が、「この子たちは父ちゃんや母ちゃんと離れているんだ。食べるものでは愛情は補えないけれど、せめてなぐさめは食べものなんだから、お前たちはがまんしろよ」と言うんです。

● だから子どもたちは私どもの寮のことよりも、お呼ばれに行った方がことが印象に残っているようですね。

## 疎開学童協力会と 実行組合

● 物資の供給については、当時、油井疎開学童協力会というものをつくりまして、このメンバーは各農地実行組合長だの、婦人会の役員というような方たちで、それに警防団の各団長も協力して、各実行組合から野菜やらじゃがいも、豆などを分けていただくこうと、学校の裁縫室でよく会合を開きました。

先ほどのお話のように、寮の方で直接受けとりに行ったりしましたが、地域によっては、どこそまで運んでやろうというのもありました。

● こんなこともありました。先生と寮母さんが大きなカボチャを分けてもらって来た、子どもたちが喜ぶだろうと早速煮たら溶けてしまって、おつゆになっちゃった。あれにはみんながっかりでした。家畜用のかぼちゃだったんです。

—最初はわりあい食糧事情も悪くなかったけど、20年に入った頃からひどくなったと生徒さんたちは言っていますが。

● 最初は、東京の方で米をよこしたんです。その時の米は炊くとうんと増えてね。おらのところは5升釜で炊くだけけれど、ふたのところまでいっぱいいっぱいに増えた。あれは朝鮮米というだか、何米というんだか、うんと増えた(笑)。ところがそれがなくなって、ここの米炊いたら、がっかり、ぜんぜん増えないの(笑)。

● でイモ入れて、麦入れて、うどん入れて増やして……。

● 一番先に、砂糖と米を持って来たんですよ。だからはじめは何も入れなくても間にあってたんです。

● それはあんたところの父兄が持って来たんでしょ。あんたところに入ったからと言って、うちの旅館までは来ないわねえ。

● ああやっぱり、来るところと来ないところがあったの。

20年に入った頃から配給の量が極端に少なくなって、米より小豆の方が多くなったりして、17人の時はまだよかったけど、火事のあと40人になってからはそれはつらかったね。

—学童疎開用として、特別配給というものはなかったのですか。一般配給と同じだったんですか。

● 同じです。米屋から買っているわけですから、人数に応じて。

● 衣料品とか木綿糸などはなくなると役場の方で分けてやったような気がします。あべこべにバターなどは先生

の方からもったりしましたね。あれはどのようなルートで先生方のところに入っていたのか知りませんが。

—それは例の例外配給です。学童疎開の。

● 木炭や薪などの燃料も一般よりは多めに分けてやりました。

—ここはお米の生産地ですから、地元で生産したものをそのまま配給していたんですか。供出の割り当ても厳しかったでしょう。

● まあ私ら正式なルートきりわからないですが、正式なルートは一般農民から政府が買い上げて、それを配給するんですが、それだけではやっていけないから、それ以外になにをやったかと言うと、やっぱり闇やるしかないわけです、われわれも。

20年になったら極端に悪くなって、大豆ばかりが配給になったりしました。子どもたちを預っている家も容易じゃなかったと思います。そこで、先ほど話の出ました、お呼ばれですね。各家庭へ時折分散させて、家庭の味を味わわせてやろうと。多少でも子どもたちの心を慰めてやろうとしたわけです。心を慰めるといっても要するに何かごちそうをしてやるということです。ま、これはよかったんじゃないかと思えます。

—農家の生産も20年に入ると減ったんですか。

● もちろん減っています。こやしやロクなものがないんです。今なら1反で8俵から10俵とれるところが、せいぜい5～6俵です。肥料も配給ですからね。それに供出が非常に苛酷でした。供出しても船で運んでいるうちに空襲でやられて沈んでしまったと言うんですから、何ほ米があっても足りないはずです。

供出をいくら強化しても農家に手持ちがなくなると、もうお手上げですよ。どんなに金を出しても手持ちがないとどうにもなりません。とくに4～6月の端境期はひどかったです。あとは馬鈴薯だけです。7月に入ると小麦がとれますから、めん類やだんごがつかれますが。その頃になると戦争も絶

望的な段階に入ってきたから、しゃにむに動員がくるし、人手不足もあるし。—食糧事情が悪くなると、子どもですから、畑のものを盗って食べるとか、そういうことはなかったですか。

● 私はそういうことは聞かなかったですね。案外この辺の人たちは柿などを与えたのではないかと思います。

● 私も聞かなかったですし、非難したという話も聞きませんでしたね。

—一般に学童疎開では、子どもたちはやせ細ってしまって、1年ぶりに帰ってきたわが子を見て痛ましい感じだったという母親もおりましたか。

● そういう話はよく聞きますが、子どもたちがやせたということは、毎日見ているとわからないです。それにあ

くいかなかったとか、という話を聞きますが、こちらの場合はどんな具合だったでしょうか、学校での授業なんかも。

● 学校の教育も各家庭の教育もそうでしたけれど、やはり親元を離れて、戦争に勝つために来てるんだからいじめるなどか、かわいがってやれとかいうことを強く言っていましたね。ですからむしろ学童疎開で来てる子の方がおっぱらにいぼってるようなところありましたよ。

—お客さま扱い……。

● そうですね、そんなところでした。

● たしかにそうでしたね。東京の子どもは言葉もきれいだし、油井の言葉はこのとおりだから。

● われわれはどれが本尊さまだかわ



それでも明るい学童たち (19年油井の学寮前にて 大和国民学校)

の当時、太った人などおりません、みんなやせてたんです。私らでも坂登るのこわかったです、体力がないから。

## 中野の子どもは 高嶺の花

—学童疎開と言いますと一般に、たとえば山の中に入っちゃってまるで村の人たちと交流がない場合とか、交流があっても子どもたち同士あまりうま

からなようなモンベはいていたわけですけど。向こうからいらした方はセルのズボンに、女の子はほとんどセラー服ですからね。

● 言葉はきれいだし、品もいいし、ですからわれわれにとっては高嶺の花のような……。

● これはぜひ言っておきたいんですが、中野区はそんな風にみんなに言われるくらい柄が違っていたんです。疎開した子どもまでどこか違ってました。これは中野区の誇りにしていいんじゃない

ないかと思えます。

● 他のところはよく知らないけど、うちに来た子どもの布団は、全部布団袋に入ってきた。夏布団と冬布団二組ずつね。たいしたものだったよ。

—学校の行事、たとえば運動会や学芸会などはみんなまぎって一緒にやっただんですか。

● クラスはまざりませんでした。教室も別です。でも行事はいっしょでしたね。

● 教室を貸したんです。

● こういうことあったと思うんですが。東京の先生方に地元の授業を何時間か受け持ってもらって、かわりに油井の先生方が大和の授業を受け持つというような。たしか私たちが言って、そういう交流をやってもらった記憶があります。

● 高等1年と2年ではそんなことも少しあったように思いますが、小学校ではありませんでしたね。

● 学力がねえ、ここの子らと違って大和は高かったようですね。この油井の学校は、この地方では相当教育の程度は高い方なんです。それが大和の子どもたちにはかなわない。どういふものかなあ。親たちが教育に熱心だからだということとはよく聞かされましたね。

—非常に中野の子どもたちはおほめにあずかっているんですが、敗戦後物資も厳しくなるし、食糧もなくなって、みんなが闇の中に放り込まれたような状態になると、そういう上品な態度とか清潔感のようなものはかえってくずれていかなかったでしょうか。最後に引きあげるまで、そういう態度を保っていましたか。

● それは変わらなかったと思えますよ。—それからこれは他の地方の記録なんですけど、寮母の子どもとか、先生の子どもは胃拡張になって、他の子どもは栄養失調になって頭だけふくれちゃった、腹がふくれちゃったということもあったようですが、この油井ではどうでしょうか。

● 栄養失調の子どもが出たんですか、

この油井から。

—1年生の子どもに栄養失調が出たと。

● うちでは1年生扱わなかったからわからないけど、そんなことなかったですよ。

## なぜ3月引き揚げが

### 9月に

—終戦になって、疎開学童をどうするかということになり、8月の末に私、こちらに参りました。そしていろいろ見たり聞いたりして、帰って区長に報告をしました。現地継続はもうダメです、1日も早く引き揚げるべきだと。

—こういう場合は、親子の愛情で人間は生活するより他ないんで、親子なら親が死ぬ時子どもも殺して死ぬこともあり得るけれど他人の子どもを殺すわけにいかない。東京がいくら食えなくても、親なら子どもの1人や2人石にかじりついては食わせるだろう。子どもたちは非常に飢えている、それは食べ物だけでなく、それ以上のものに飢えている。お父さん、お母さん、兄弟といったものであろう。ところが多数意見は、3月までやると、これは東京都も政府の方針もそうだったようです。で3月までということになったものだから予算の配分もすませて、校長がそれを持って疎開地に行く手はずになっていたのです。ところが9月末になって急に中止になって、あわてて帰って来たわけです。

私、今もって疑問に思うのは、あの時、政府も県も都も区も、すでに決まっていた方針をなぜ急に、それも非常に早く変更したのかということ。やはり、地元の方々から、もうこういうものは継続されては困る、物心両面で負担が大きすぎるというような声が出たのでしょうか。

● そんなことはなかったですよ。

● ないですね。

● そんなこと聞かなかったですよ。

● たしかに敗戦直後は、一種の虚脱状態が何日かはありました。しかしこんなことではいけないという気持ちも一

方ではありました。

—8月15日を境にして、学童疎開に対する考え方というものはぜんぜん変わらなかったですか。

● 考え方はぜんぜん変わっていませんね。これははっきり言えると思えます。今までやった方法でならば、気持ちとしても何とか置いてあげられるんじゃないかというような考えていました。ただ勝つんだ、勝つんだと思っていたのが、もう負けたんだと言われたことで動揺があったのは間違いありません。だからと言って学童たちをこれで投げてもいいんだというような考え方は、みじんもなかったと思えます。

● そんなことは考えられないですよ。終戦になったからと言って、役場の方で配給とめっちゃったわけでもなく、やっぱり一生懸命野菜なんかもらって来て食べさせていたんですから。

## 疎開もういや!

### かわいそうすぎる

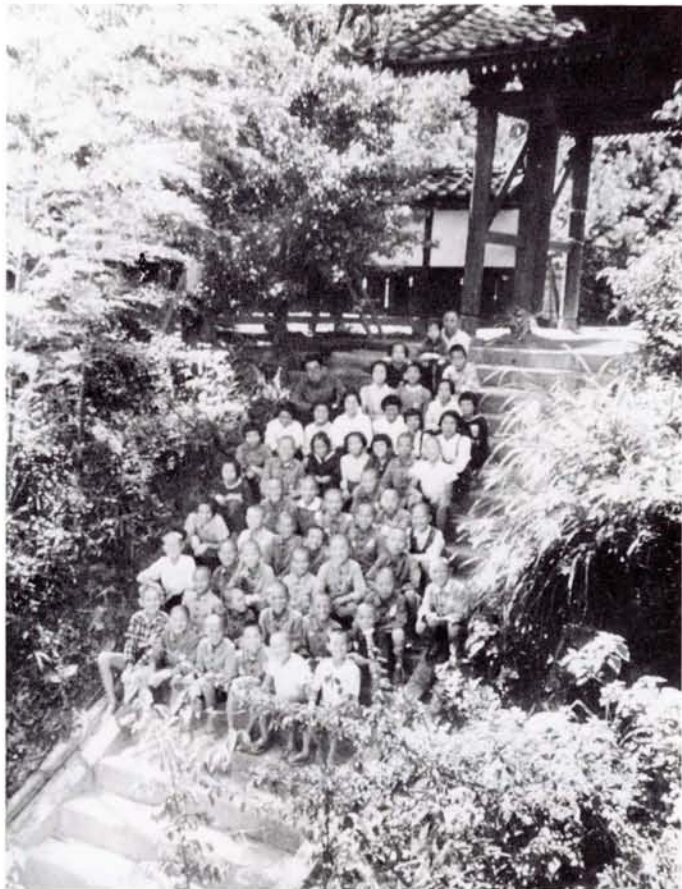
—学童疎開というのは、ある意味では、どうしようもなく子どもたちを田舎へ放っばったわけです。それを今の時点で考えるとどうですか、実際苦しい経験をされて、あんなことはもう二度といやだとか。

● いやですね。

—ああいう経験もよかったんじゃないかとか、そういう意見も少しは聞かれますが。

● そうは思いませんよ。かわいそうですよ。

● 今思うと、小浜が火事で焼け出されて、学童たちが行くところがなかった時に、農家や菓子屋、雑貨屋などに2~3人ずつ割り当てて、宿舎にしたんです。その時、今ならばきっと不満を言うだろうに、何の不満もなく、うちは受けられないというような家は1軒もなかった、受けてよかったと今でも言っている家ばかりです。理屈抜きで、勝つためだったんだけれど、みんなができる限りのことをやっているう



お寺の石段に腰かけて (20年 福島県夏井にて 桃園第二国民学校) <郷達殖氏提供>



先生と近くの川へ (20年 福島県石川町猫啼 鷲宮国民学校) <関口保氏提供>

ちに、愛情がどんどん深くなって、大人になってからも訪ねてくれる子がいるんです。

● 引き揚げて行く時、婦人会の方たちは泣いて送りましたね。たった1年くらいであれだけの心の交流ができたということは、今の世相ではなかなかありえないことでしょうね。

——どうもありがとうございました。



川岸の大きな岩の上で先生と (20年 福島県石川町猫啼にて 鷲宮国民学校) <関口保氏提供>



疎開の前に北野神社で (19年 野方国民学校) <川勝保氏提供>

龍台寺にて (20年 鷲宮国民学校) <関口保氏提供>



## 23歳の若い引率教師は…

中島武男氏に聞く

桃園国民学校学童317名を引率して長野県高遠に疎開。

世界中が戦争をしたけれど、学童疎開を実施したのは日本だけだったという。そして、これだけが唯一の成功策であったとも。少なくとも幼い生命たちを戦火から守ったという意味では成功であったのであろう。

しかし、その陰には多くの人びとの涙ぐましい努力があった。中でも幼い日に家族と別れ、耐えるこ

とを強いられた子どもたちを四六時中支え続けた引率教師たちの労苦は、並大抵ではなかったはずだ。

それは今になってもまだ、筆舌に尽しがたいものがあるのであろう。若くして長野県高遠地区のリーダーとして、その大任を果たした教師は言葉少なに、ひかえめに当時の模様を語ってくれた。

“あれは教師としての私の、最大の試練でした”と。

好意的だった  
現地の人びと

——先生は当時いちばん若くていちばん遠いところへ赴任されたと聞いておりますが。

● 私、当時23歳でまだ独身でした。その年代であの当時先生をしている者はほとんどおりませんでしたね。私が徴兵検査が三種合格で、胸を悪くした後だったものですから。入院までもいなくて、学校に残されたわけです。

全くつらかったですね。兵隊に引っぱられた方がどんなにか楽だと思いました。長野県に連れて行ったのは女の人ほとんどで、私がチーフのような形になって、もう泣きたいようなことがいっぱいありました。

——記録によりますと19年8月22日にこちらを出られたようですが。

● 確かそうです。317名、第一次疎開です。その前は縁故でして、残っていた子どもは、ほとんど地方に適当な縁故がない者ばかりでした。もう少したってから行くはずだったんですが、案外空襲が早く来たものですから、急に早くなって。でも、もっと早くから手を打って行った連中でも、うまくいなくて後でもどってきた者もいましたね。縁故疎開は、当時われわれもあまりすすめなかったです。でも本当は縁故をもっとすすめるべきだったんです。——縁故疎開と集団疎開の家の状態は、たとえば縁故は裕福な家が多かったとか、いうことはありますか。

● それはありません。少しは縁故があっても、5、6年になると、団体に疎開させた方が子どものためにもいいと考える親もずいぶんありました。そういう時代でもありましたね。ですから私が連れて行った連中の親は、家庭的に困っているとか、教育に無関心とかいうよりも、むしろ一生懸命の人

が多かったと思います。最初の晩は旅行にでも行くような感じで楽しそうに出かけたんですけど、一晩あけたらもうメソメソしちゃってまいりました。——現地の受け入れはどうでしたか。

● まあ長野県自体が米の移入県ですから、食糧については、向こうの人たちもあまり感心した気持ではなかったでしょうが、小学校の時からこうやって親を離れて来なければならぬというような思いやりは非常に持っていましたね。ただこちらの子どもたちは東京で生まれ育っているから畑のことも、作物のありがたさも知らないものですから、平気で畑の中に入りこんだり、柿があれば木に登って取って食べたりしておこられましたね。でも感情的にはそう悪くはなかったです。ただ闇が買えませんで、全部配給ですから、それがいちばん大変でした。もともと食糧が充分でないところですから。——作業員や寮母さんは現地採用ですか。





中島先生の授業風景  
(19年蓮華寺にて)

● こちらからつれて行ってもいいということでしたが急でしたし、うまく見つからなかったこともありまして、むしろ現地のの方がいいだろうということでも向こうで頼んだのです。作業員2人、寮母2人、でもその人たちは私より年上で指図をするのがいやでしたね。ケンカはするし。

——先生は何年の担任ですか。

● 行った時は5年の男子、40名ぐらいです。建福寺は5年生の女子で、山室鉦泉が6年生でした。この山室鉦泉は土地の人が農繁期に慰安をするためにつくった鉦泉でたいした宿ではなかったです。私のところは蓮華寺です。

次の朝、辰野に着きましたら、婦人会の人たちがかわいそうによく来たといって握りめしかなんか用意して歓待してくれました。公民館のようなところに案内してくれてご飯をご馳走になりました。そこで近くの長久寺に3年生が預けられたので、私たちは別れて飯田線に乗り変えて伊那町へ行きました。この伊那町から高遠までは昔流に言えば3里(約12km)ほどあります。バスが無かったからトラック3台借りて、みんな立ち乗りで、今はあんな芸当できないでしょうね。そしてとにかく高遠小学校に着きましたら、校庭にまたたくさんの方が集まっていて、迎えてくれました。

——行く前に連絡はついていたのでですか。

● 今で言えば教育委員会同士で充分

連絡はしてあったと思います。行った時は子どもたちの荷物を整理する整理棚とか先生の部屋をここにしてもらうとか、教える部屋とか、黒板、そんなものは準備されていました。ただ向こうへ行った時は夏でしたからまだよかったですけど、冬を越すに当たって寒さには困りました。お寺の大きな座敷に寝泊りするんですから。私の寺では、1畳敷の大きなコタツを6つ作ってくれたんですが、それでも寒かったですね。

集団疎開が成功するかしないかは受け入れ側の町長と担当の警察署長の腕によると言われていたんです。ですから私なんか町長と校長と署長と年中見学会に行っていて、警察署では年中会議して、署長は一生懸命でしたよ。当時警察署長は町長より偉いですから、何でも署長のいうなりに町長はやってくれました。



## 食料不足と 責任の中で

——現地の授業はどんな風に。

● 授業といってもその町には1つしか学校がありませんから私どもはお寺です。ピアノなんかないですから、最初音楽の時間だけは、2回あるうちの1回は学校を借りました。日課を作っただけでそれに沿って生活することにしたんですけど、そこの坊さんが朝5時になるとお務めを始めるんで、それでは子どもの睡眠時間が短かすぎるから、1時間遅らせてくれと署長から話があったらしくて6時になりました。で急いで起きて顔洗って全員が本堂に座り込む頃に坊さんのお経も終わります。そのあと、いい話してくれました。うちの坊さんは立正大学の出でなかなかのインテリで、すばらしい方でした。ただ酒ぐせが悪くて困りましたが。(笑)

それから朝礼、掃除、食事ですね。ああ、6時は冬の時間で、夏は5時半起床でした。6時から本堂に集まって正座していっしょにお経を読むのです。お経を覚えた子もいましたね。

——時間割などは。

● 東京にいる時と同じです。だいたい徹底してやりました。東京からオルガンを送ってもらってからは音楽もお寺でやりました。ただ食糧不足ですか



雪合戦、長野県の冬は厳しく雪もよく降った（19年学寮にて）



お寺の本堂で食事、食糧事情は悪く子どもたちはだんだんやせて（19年蓮華寺にて）

ら、食糧集めによく歩きましたね。栗拾いとか。栗なんかは林をもっている人が特に好意で提供してくれましたね。米俵で2俵半拾ったことありました。それを剥いてご飯のたしにしました。それから春はワラビ採り。1週間おみそ汁の実はわらびでした。

2年目に入ってから米の飯より他の物の方が多くなったですね。いちばんひどかったのは戦争に負けた8月以降。いつまでいるのかわからなかったですから、コウリヤンばかりです。見た目は赤飯みたいですが、まことに食べられたものではありません。仕方なく食べましたが。おかずは、そこにできる野菜の漬物とか、いつ作ったのかわからないような配給の助宗鱈とか、干物類が多かったですね。ですから子どもたちはやせましたね。腹が空いて、もうどうしようもない。

こんなことがありました。農家で馬や牛が少なくなっていた時代で、稲を植えるために肥料を蒔きますね。それはいわゆる干し草などを土の下に埋めてくしゃくしゃにすることなんです。牛馬もいない人手もない、で疎開の人がやってくれないかといわれて、よしきたと大勢で行って田を手伝うんです。すると必ず米の飯のおにぎりをくれるわけです。ですからそんな時は授業はなしです。

——面会人は何か持ってくるでしょう。

- 持ってきて結構、東京にもないで

しょうが。ただし自分の子どもだけの物では困る。どんなに少なくとも全員に少しずつでも分けられるように持ってきてくれるよう頼みました。でも切符も充分に買えない時代ですからあまり来られなかったですね。かえって何人かのグループで来られることが多かったです。行こうと思っても行けない人もいますからね。

——夕食後は何をして。

- 夕食後は後片づけと掃除、1時間くらい休んで、7時頃から夜の自習時間を作って、私も個人的な指導をしたり。強制的なのは1時間くらいで、あとは自由時間。将棋が強くなった子どもがいましたね、かなわなかったです。将棋やトランプそんなことをして遊んでいました。演芸会とか仮装行列が楽しみで、1ヵ月に1回はやったでしょう。

——規則的な生活なんですね。

- そうです。子どもはよく言うことを聞きましたから、今の子どもとは大分違います。でも日曜日は困りました。行動範囲を決めてそこまでは自由に行ってよい。近くに川がありまして、夏はよく泳がせに連れて行きました。普通なら子どもたちだけで行かせればいいのですが、やっぱり責任上、放っておくこともできなくてついて行くのです。よく散歩にも出ましたね、遠足みたいに。6年生が山室にいましたから、逢いに行ったり来たり、片道歩いて1

時間くらいかかるのですが。

——シラミ取りも。

- あれにはまいりました。寮母さんたちは私たちが悪いのだとさかんに悲観してましたが、どういものでしょう。寮母もずいぶん洗濯してくれたんですが、やっぱりダメでした。私のところでは大きな風呂を作ってくれましたので、みんな脱がせて煮立てて殺しましたが、それでもダメでした。

## 苦しかった子どもの病気と逃げ出し

- 私がいちばん困ったのは、子どもが逃げ出したことです。あれにはまいりました。団体生活には友達同士のグループができるんです。特に5、6年になりますと。私が警察なんかの会議に行って留守の時に、トラブルが起きてケンカになり、仲間はずれにされて、これがいちばんの原因だったらいいです。逃げ出されて、夕方にそれがわかるわけですね。もう暗くなるのに、夕飯も食べずに、金もなし食べるものも持たずにいなくなっている。おまけに30分間トラックにゆられて来た道しか知らないわけです。こちらに来て相当たっていますが、出かけたこともないですから。一晩中寝ないでその辺を捜しまわって。結局東京まで帰っていたんですが、電報が来て安心しました。



お寺の本堂で座学、姿勢がとて面白い（19年）

どこまでか歩いたと言っていました。原因は子ども同士のケンカですね。子ども同士のケンカもひどいのがあったらしいです、ボスがいるんですよ。後で聞いてみると、寺から抜け出して、そいつだけをいじめたらしいです。ランチに近いようなことをやったらしい。大きくなってから聞きました。

——部屋割りは何か基準があつてきめたのですか。

● うちの場合は、間仕切りはあつたのですが、取りはずした方が大勢寝られるので全部いっしょにしました。もちろん班は作りました、いろんな風を考えて。リーダーになりそうな者を決めて、あの子とあの子は仲が悪いから少し離そうとか、あの子は泣き虫だから面倒見のいい子といっしょにしようとか。そしていろいろ役割をきめて。掃除の班長とか、食事の当番長とか、勉強の面でもいろいろ役割をきめました。

——蓮華寺というのは相当広かつたようですね。

● 大きかつたですね。子どもたちを入れた庫裏が80畳くらいありました。私に提供してくれた部屋が10畳、寮母の部屋が6畳、本堂が大きいですから授業は本堂の一角でやりました。その次に大きかつたのは建福寺、ここも大きかつたです。

——運動会などは現地の学校といっしょに。

● 運動会やりましたね。われわれもいっしょに競技させられたの憶えています。現地の先生方は非常に協力的でした。子どもたち同士もケンカとかトラブルもなかつたです。

——親から子どもに手紙が来ると先生方が一応見るのですか。

● 親からは別に見ませんが、子どもが書くものは作文の資料がてら見ましたね。変なことを書いた者もいて、私に黙って出した者は、親がえらく心配して、早速問い合わせの手紙が来たりしました。

——日記なんかもつけていたのでしょうか。

● 日課表をつけていました。そういうことはむしろよくできましたね。いっしょの寝泊りの生活ですから。子どもの性格もよくわかりますね。普通だったら昼間だけの勉強の指導ですが1日中いっしょですから。高遠の校長がよく言っていました。こういう時にこそほんとうの教育というものができるんだぞと。



相撲に興じる子どもたち（19年）

るんだぞと。

——子どもはやはり帰りたかつたでしょうね。

● そりゃあ帰りたいですよ。ですから小さい子は騙されやすいけれど、5年生くらいになると、しっかりと行ってやらなければ納得しませんから、ぼくは何回も、日本は大変なんだということを行いました。無理じいですけど毎日の話の中に入れるわけです。初めのうちはなかなかできなかったのですが、そのうち慣れました。男の子でも夜になるとメソメソはじめるのがいますからね。ほかの寺の女の先生は新卒で来た人でしたが、その先生なんか泣いて電話してくるんです。先生明日こういうことがあるんですが、どうしたらいいでしょう。先生が泣いているんです。こっちだって泣きたくなりますよ。22、3歳の女の先生が、私と同じ5年生を同じ人数抱えてやるのですからそりゃあ大変だったのです。その寺では作業員同士、寺の奥さんとの関係で何かまずいことがあつたらしく、そういう問題でも困っていました。

——先生のところの作業員や寮母と子どもたちとの間はうまくいっていたのですか。

● 子どもとの間は問題なかつたのですが、寮母同士があわなくて、まずかつたです。

——雪が深かつたのでしょうか。

● 歩けないほどではありません。30



山からの薪運びは子どもたちの仕事（19年）

広い境内を掃除する子どもたち（19年運華寺にて）

センチ位でしょうか。しかし寒かったです。マイナス12、3度はざらでした。私が行った時にはありませんでしたが、醤油が凍ったと言っていました。

——病気がいちばん困るでしょうね。

● 私のところは幸い疑いがあるという程度で伝染病的なものにかからずすみましたが、食糧、栄養不足からくるものが非常に多かったですね。ビタミンCの不足も。

——エビオス消化剤をいつも機の引き出しに入れていたという子がいましたね。他の学校の子ですが。6年生で。

● それは優秀な子ですよ。知恵が働いたんでしょう。

——学校の費用はどうしていたのですか。

● 費用は親から集めて送ってもらっていたようです。毎月1回、学校に残っていた先生のうち1人が必ず連絡に来てました。先生たちの給料もありますから、ほとんど校長でしたが、その時にいっしょに持ってきてもらっていたようです。わずかだったと思います。

——各家庭は1ヵ月10円、あとは都が補助していたんですね。

● そうだと思います。学校ですと、どんなに子どもたちが騒いでも板の間ですが、ちょうどあの年齢の子はいくら食事が悪いからといっても動きまわります。畳の上で1日中ですから畳を傷めるんですよ。集団疎開が終ったあと、寺の檀家の人たちが来て、自分た

ちのつくった寺が、非常に情けない状態になっているとこぼしたらしいです。寺の坊さんからも直接父兄に話があったらしくて、私どもも気の毒だと思って、お金を出しあって、足しにしてくれというようなことでした。

——帰ってくるまで東京へは一度もいらっしやらなかったのですか。

● いや連絡でチョイチョイ帰りました。浅草地方が焼けた3月の初めにもちょうど帰ってきて、空襲というものを見に行きました。あれはものすごかったです。道路にグァーと死人が出て、赤ちゃんを抱いたまま黒焦げになっていたり、溝に飛びこんで死んでいたり、あの残酷さはとても。でもああいうことがあったから5月の空襲の時は死んだ人はわりあい少なかったんじゃないでしょうか。

——で帰る頃は5年生が6年生になって。

● そうです。あちらで5年、6年と持ちあがったんです。みんなそうです。ずっと同じ寺で最後まで。子どもたちはほんとうに戦争の苦しみを味わいました。それでも勝つまではと文句もいわずに。



コタツでトランプ（19年）

## 終戦の日は…

——終戦の日はどんな気持ちでしたか。

● 戦争に負けたんだということを知った子どもたちが、6年生ですよ、ね、「ぼくらが大きくなったらやっつけてやろう」と。私は30何人の子どもたちの食糧で困りはてていましたから負けたくやしきよりも、この集団生活から開放されるという喜びの方が大きかったですね。あまりにもつらかったですから。ところがしばらくしたら、「焼け野原の東京に子どもたちを帰すわけにはいかん、集団疎開は特別の事情がない限り、無期延期だ」と言ってきたんですね。今年もここで冬を過ごすかと思うとがっかりしましたね。そして急に11月になって帰ることになりました。

うちの寺の坊さんが偉い人でした。私が高遠の疎開を面倒みたという風な形でしたが、同時に寺の受入れ側の方の主任はうちの坊さんがやってくれました。最初の年の冬、何たって東京の寒さと比較にならない、何とか寒さ対策をとということで大きなコタツを作ってくれましたが、問題は燃料なんです。炭の配給なんてごくわずかですから、大きなコタツを温めるにはとても間に合わない。そこで金を集めてすぐに手



冬の燃料確保のため、炭焼きも手伝う（19年）



娯楽会を頻繁に行う、質素ながら楽しい仮装衣裳（19年）

を打ってくれました。ひと山雑木林を買って、炭焼きの老人を見つけてくれて、高遠のわれわれの疎開児童の炭は全部1ヵ所でまかなったのですから、炭には困らないですんだのです。

——写真に炭焼き小屋が写ってますね。

● あれは炭焼き小屋に行って炭を背おってくるところです。とにかく受入れ側の人情はほんとうによかったです。時期が時期ですからね。

——疎開の子どもたちの中には家が焼けた子もいたんですが、そういう連絡は。

● ありました。焼けない家はなかったです、全部焼けました。5月25日の空襲で全部焼けたという連絡がありました。別に子どもたちは来るものが来たというくらいであまりショックはありませんでしたね。

## 苦しみに苦しんだ 大事業

——とにかく大事業でしたね。

● 戦争でどうにもならないということで無理矢理やったことですが、なかなかできないことです。

——世界中戦争でしたが、学童疎開をやったのは日本だけでしょう。

● そうかもしれません。一応成功したのは集団疎開だけとかで。

——最後まで学校に残っていた生徒はどのくらいいたのでしょうか。

● 桃園は4人ではなかったですか。授業はほとんどやれなかったと思いますよ。毎日空襲空襲で。桃園一体は、建物疎開で島みたいになって、桃園国民学校は6教室焼け残っていて、東西に小さな校舎が2つあって、帰って来てからはそこで授業をしました。下宿もないですから独身の先生は教室の角に畳を敷いて寝泊りですよ。

——先生として学童疎開に行ったことは、どういう風にお考えですか。

● 無我夢中でしたね。ああいう形で1年余り過ごしたことは、何か自分が教育者として一つ大切な経験をしたということで心の支えになっている、これは言えると思います。とにかく苦しみに苦しんだと自分で言うのも何ですが、この子にしょう紅熱の疑いがあると言われると、隔離病院はないし、自分が抱いて寝なきゃなりませんね。毎晩毎晩おしっこしてどうにもならない子もいる、精神的にその子の負担も軽くしてやらなければならない。その子の寝てたところの畳が腐りましたね。そういう身の世話もしなければなりませんし、まあ親の仕事から先生の仕事いっさいをやったという経験、これは私の現在まで来るうちの支えになったというような感じがしています。

当時は何とも思いません。苦しみがやらやりましたけど、帰ってきてから

あまりにも生活が変わりましたから生きかえったような気がしましたね。自分1人のことをしていればいいのですから。向こうでは四六時中全てが責任でしょう。

こんなこともありました。鯉の滝登りという遊びがあって、子どもたちが向かいあって手をつないでずうと並んで1人の子どもがその並んだ手の上に乗って泳いで渡る遊びがありました。ある時、先生、何々君が鯉の滝登りで落ちて頭を打って仮死状態になっている、死んでしまいそうだと行って来た。私は靴もはかないで寒いのに裸足でその子をかかえて、普通に歩いて15分かかるところの外科医院に飛んで行ったこともありました。

もうほんとうにいろいろなことがありました。でも何とか1年数ヵ月を過ごせたのは、寺の坊さんのおかげです。坊さんはたえず子どもたちに、先生はこんなに大変なんだからと話をしてくれるし、子どもたちをかわいがってくれました。あの人がいなかったらとても務まらなかったでしょうね。

——その住職さんは何て方ですか。

● 長谷川義敬さんといいます。別れる時、19日の晩も、先生、ほくは元来酒は好きだが、今日こそ正気で子どもたちと別れることはできない。今晚はいっしょに飲もうじゃないかと、朝まで2人で飲み明かしました。（了）  
（P.90～P.95の写真は全て中島武男氏提供）

# 家族たちは…



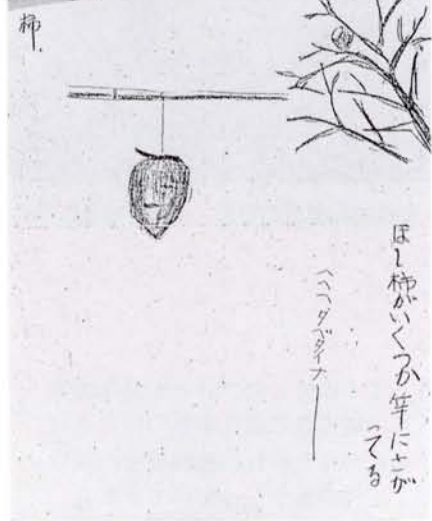
〈仲町小学校提供〉



弟から疎開先のお姉さんへ  
〈斎藤陸子氏提供〉



(20年6月)  
〈関口保氏提供〉



手紙の最後にはこんな絵が 〈八並瑞枝子氏提供〉

## 便りは、毎日食物の絵ばかり

うちは男の子2人、6年と4年が本郷小学校で、上諏訪に集団疎開しました。親は交替で面会に行くことになってまして、うちにもその番が回ってきて、近所の奥さんと2人で配給の粉などでおまんじゅうを作って、持てるだけ持って、自分の食べるお米も持って、行きました。白米を、わずかの配給の中から自分は食べないで少しずつためて、旅館へ出すんです。

行きましたら80人位収容の旅館で、玄関の手すりのところにみんな腰かけてこうして見てるわけです。ああ嫌だなあんな座り方してと思っているうちに、持って行った袋に、モチ米のようなシラミが上がってくるんですね。

食事を私たちにも出してくれたんですが、お米はほんの少いで、サツマイモを大きく切ったのが浮いている雑炊なんです。もう腐りかけて臭うようなの。これが三度三度でしたね。こんなものでお腹の足しになるのかと思ったらかわいそうで。

上の子どもは大きいですからあまり言っても来ませんが、下のがやたらに書

いてよこすんです。栄養剤送ってくれと毎日連続で、その1、その2と食べる物のことばかり。おまんじゅうだの湯気の立っているふかしイモだの絵に描いて。

それ毎日毎日読んでいたら、親というのは、もう自分だけお腹いっぱい食べるなんて出来ませんでしたね。

(山田みのえ・33歳・主婦・宮里町)

## 父兄代表として現地へ

私は子ども2人、油井と小浜に疎開させて、大変先生方にお世話になりました。今で言えばPTAのような後援会がありまして、そこで父兄代表として各学寮に用が出来ますと親御さんたちを代表して2~3人で、手紙とか日用品などを一定の場所に持ってきていたでいて、また学校の方で残った食糧があるとそれも合わせて、沢山しよって何回か現地へ参りました。

行きますと子どもたちは寝る前に東京の方に向かって、「お父さん、お母さん、お休みなさい」ときちっと礼をしてるんです。それを見て哀れな気持ちしたのを憶えております。

ちょうど油井の大谷屋さんをお訪ね

した時に、先生がしりをはしよって便所の掃除をなさってまして、寒い時でしたけど雑巾でふいておられました。子どもたちが消化不良を起こしてよく便所を汚したようですね。ほんとうに先生も大変だな、ご苦労なんだなーと思いました。

(伊藤某・住所不明)

## 火事にも適切な誘導

福島県の小浜が火事になった時は、ちょうどうちの子もそこにおりまして、焼け出されたわけですけど、ただの1人のケガ人もなく、全員無事で、ほんとうに今でも先生方の適切な誘導に感謝しております。4つの学寮が全焼して、それも夜の寝入りばなで、風が強くてあっという間に火の海になったそうです。

先生方、寮母さんたちがそれだけ子どもたちの安全を考えながら生活していた証拠だと思いました。

また寒い時期に、1月だったと思うのですが、あちこちのお宅で子どもたちをあずかってくれて、あんなにほっとしたことがなかったです。

(匿名)

